

# せたかむい

古平町役場総務課  
☎42-2181(代表)  
平成20年3月1日

## 年表で読む 古平の歴史

[127]

### 商工業 (13)

～続く～

#### 無限責任大典記念 古平信用組合

～続く～

#### ◇リンゴから稻作へ

古平では明治初年、当時の開拓使

からリンゴ苗木の配付を受け、全く

栽培の経験が無かつたが、石井常助

らがチョベタン川河畔で自家用とし

て植えたり、畑の端に僅かに植えら

れていた。

その後、栽培技術の指導も受けた

が、気候や風土が古平の土地に適

していなか生産も順調で、経営上

有利な作物であることがわかり、傾

斜地などで栽培する農家が次第に増えていった。

やがて、現在のパークゴルフ場周辺から古平川岸にいたる一帯はリンゴ畑になり、港町の山の上、丸山山麓にもリンゴが植えられ、明治二三年

現在の本数は、古平一、五七九本、余市三、八八六本、忍路一、三四一本を数えるほどであった。

ところが大正時代の中頃になると、古平でも米が収穫出来る。一といふことは農民にとっても大きな喜びであった。しかし、昭和になると米価は下がり始めた上、昭和六年から五年間にも及ぶ、天候不順による全道的な凶作に見舞われた。古

平町は、道央の主な米作地帯に比べて被害はやや少なかつたものの、借入金の返済が難しくなってきた。

◇信用組合による救済

灌漑溝は完成し古平川流域では

「これは第一次世界大戦(大正三七年)後の、政府の食糧増産計画も大いに影響していた。

水田には何よりも水路が不可欠であったが、幸い古平川流域であることから水量もあり、水田に水を引く灌漑溝の設置が急務となつた。

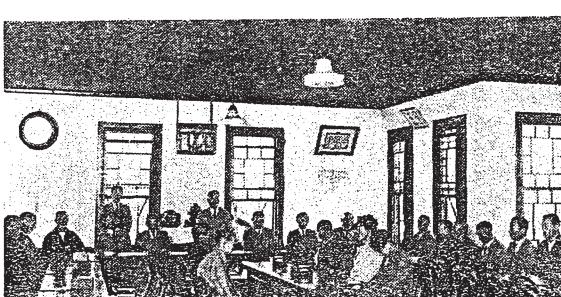
#### ◇灌漑溝組合へ融資

早い頃道内の水田地帯では、北海道独自の土功組合という組織があり、灌漑工事については補助するなどの政策があった。古平では地主らにより灌漑溝組合を作り、反別で費用を負担し、不足分は当時の北海道銀行と古平信用組合から半分づつ借り入れ、工事が行われた。

～続く～

急迫した事態に灌漑溝組合では大騒ぎになり、結果的に古平信用組合にその救済を申し込んで来た。水田農家にとつては勿論だが、古平町としても町の経済上重要な問題であることがから、古平信用組合では、当時の勧業銀行から長期の借り入れをし、北海道銀行からの借入金全額を返済した。

北海道銀行からは強硬な催促があり、最終的には農地を差し押さえられるという通知が届けられた。



↑ 灌漑溝組合総会（信用組合事務所）

水田が広まつたが、思わぬ自然災害により、返済金が滞つてしまつうといふ事態になつた。古平信用組合では返済を待つことであつたが、

北道銀からは強硬な催促があり、最終的には農地を差し押さえられるという通知が届けられた。

昭和三年 ～続く

らん。

▼七月四日

起床六時、裏の花畠へ水をくれる。ダリヤは元気よく早起をもつたものある。菊苗も根付いたようだ。熊さんは出面四人と今日も袋かけだ。天気は快晴、暑中の如き暑さだ。毎日毎日よく天気も続くことだ。午後、自転車でヨヘ行きキウリ苗を貰つて来る。その後、トシと一人で正治を連れ、農園へサクランボとイチゴもぎをやる。数日來の暑さと天氣で例年より早く熟した。正治は下に落としたサクランボを拾つて喜んでいる。イチゴもたくさんとれたが草の中には小さい。明年は草取りもよくやって手入れし、よいものをとらねばならぬ。四時頃、妻と四郎が来て、今日勇丸が小樽へ行くので、幸治のところへサクランボをやるとして採りに来た。私と正治は先に帰つたが、トミは手伝いをしていつしょに六時頃帰つて來た。私は勇丸へ荷物を託した。夜、看護婦さんへ手紙を書く。今夜も星が輝き良夜、明日も快晴な

▼七月五日

起床五時、熊さんは袋かけで早くから行く。私も六時頃農園へ行く。女の出面一人と袋かけをやっているが、かけ残したよい玉がまだたくさんある。私は花畠の草取り、土寄せなどをして七時帰る。今日は札幌から伊藤港湾課

高野名幸作さんの日記から  
当時の世相を見る

(134)

長、札幌土木事務所長、その他一行五名が来られるとのことで、役場まで出迎えに出でくれとの

では明日セリ売りするとのこと。

▼七月六日

起床五時、今日も天気快晴、よく続くことだ。袋かけに行くが6号などはまだ見落としがたくさんある。八時頃、妻と四郎が

ビール、サイダーなど出る。九時過ぎの自動車で余別へ向けて出発された。私はその後自転車でヨ、

▼七月八日

起床六時、野塚の曾我さんが七時の自動車で帰るというので、

新地町まで行き、帰つてから熊さんへ弁当とお茶を届ける。暑中の暑さだ。午後から吉治や四郎が

サクランボの番兵に行き、カン缶叩きをする。私は袋はりをやるが、夜になってあまり暑いので夕食後、正治を自転車に乗せ、種田干場で自転車競走の練習をしているので見に行く。小野菓子屋

命だ。小野菓子屋でセリがあると、いうのでちよと行つて見ると、菓子類は袋に入れてせつている。大勢の人で見る事もできないほどだ。場所もよく、売れ行きもよいようだ。夜、曾我忠さん、支店の主人らが来て、ソの場所の件につき相談する。

▼七月七日

起床五時、熊さんは四時頃から行く。私は熊さんの弁当を持つて五時半に行き、花畠を見回る。

白バラが始めて咲く、昨秋、小樽から買つたものだ。グラジオラスの白、モモ色の早咲きが咲く、珍しいよい花だ。水をやり草取りをして、いろいろな花を手折つて七時帰る。イワシ網も切り上げ、浜は閑散となる。小野さんでは今日もセリをやつている。午後四時頃、トミ、四郎、正治らを連れ、農園のサクランボもぎに行く。随分と熟していておいしい。花に水をやり七時帰る。

サクランボをもぎに来る。サクラ

ンボも随分赤くなつたので、雨の降らぬうちにもぐといつて一生懸

熊さんと妻はサクランボをやる  
とて農園へもぎに行く。私は祭り  
が近くなつたので、床屋へ散髪に  
行く。八時頃から小雨がポツポ  
ツ降り出した。サクランボもイチ  
ゴも雨は禁物ゆえ、雨の前にもぐ  
とて妻らがまた行く。中の孫、  
二二歳が亡くなつたというのでお  
悔やみに行く。氣の毒なことだ。  
町中は大国旗などを立てお祭り  
らしくなつた。妻らはサクランボ  
をもぎ正午頃帰つて来た。私は自  
転車でヨ、井、平、半、田などへ配達する。四時頃になりよい  
雨が降る。一五日間も晴れ続き  
で作物類は困つていたが、この雨  
はよい雨だ。蒸し暑いのでタライ  
湯をし子供らも皆入る。七時過  
ぎの自動車で、岡崎主人一本の  
常ちやんを連れて来られる。

▼七月九日

起床五時、熊さんはコヤシ汲み  
をやる。暗いうちから暗くなる  
までよく働く、仕事の熱心な人  
だ。今日はお祭りで宵宮祭、花売  
りの人たちが朝早くからたくさん  
通る。タケノコ、とうふ売りの  
声も聞こえ、それぞれよく売れて  
いる。

等はサの正直だ。五時帰る。よ  
い天気であった。この日赤飯の馳  
走ある。暑いのでタライ湯をする。  
いく。今日も暑く白地でちょうど  
よい。午前中、岡崎さんのところへ  
面会に行き話をして帰る。悦  
三もすっかり良くなり、ジュバン  
一枚で四郎、正治らと騒いでいる。  
夕方、岡崎主人が来られ、父と  
しばらく話して帰られた。七時  
半頃、妻、吉治、トミ、四郎らが  
宵宮祭の参詣に行く。子供らも  
大喜びだ。私は留守番、自動車  
が客を乗せて休みなく走っている。  
向かいの電灯会社では屋根から  
花電球を吊しきれいだ。

▼七月一〇日

起床五時、今日は祭礼当日、七  
時から郷社で式があるので、私も  
六時半自転車で行く。田村支所  
長供進使としてお出でになり、  
式が終つたのは八時半、今日の奉  
行は本主人だ。九時帰る。見  
世物小屋二軒、今日は種田干場  
で自転車競走があり、子供らは  
午前中から見に行く。私も午後  
から四郎を連れて行く。選手の  
競走はなかなか面白かった。一流  
等は原田店員の中井、二流一

く。五月末から六月始めにかけ  
てなかなかの重態で難しかつたが、  
それでも全快して良かった。妻は  
午後から農園へ行き夕方帰る。昨  
日のお祭りで行かなかつたので、  
勢の人が集まる。

▼七月一一日

天気快晴、お祭り最中で町は  
賑やかだ。起床五時、サキの命日  
で、私は農園へイチゴをもぎに行  
く。生前中はイチゴが大好物であ  
つたので早速仏壇へ供える。イチゴ  
も草取りや肥料などをやり手入  
れをすればたくさんなる。ソ曾  
我さんの四十九日なのでお参り  
に行く。帰つて八時半からお祭り  
のお供で恵比須神社へ行く。九時、  
御輿がご出発、今日の奉行はセ、  
種田さ、浜町を廻り、一二時、畠  
の小野寺さんで昼食になる。今  
日の暑さの厳しいことナカナカゆ  
るくない。十でシャツ一枚にな  
り涼む。サクランボを馳走になる。  
浜町を廻り四時、港町種田の前  
で見送り帰る。随分疲れた。

▼七月一二日

六時起床、今日も快晴、畠作物  
には困つたものだ。朝、裏庭の花  
畠に水をやる。熊さんは農園行  
き。私は信用組合で用達しをし、  
自転車で銀行へ行き、帰りヨに  
寄つて帰る。朝顔のつるが出土たの  
で手しばをやる。四時頃農園行  
き。バラ花盛り、赤バラ、白、桃色  
などとつてくる。明日小樽へ行く  
べく支度をする。

お祭りも無事に終わり、町はヒ  
ツソリとした。不漁の割に賑やか  
のことになり妻が学校へ連れて行  
く。五月末から六月始めにかけ  
てなかなかの重態で難しかつたが、  
それでも全快して良かった。妻は  
午後から農園へ行き夕方帰る。昨  
日のお祭りで行かなかつたので、  
勢の人が集まる。

な祭りであった。今日はお祭り  
の後片付けをやる。相変わらず  
の天気快晴、畠作物は日照りで  
何れも困る。悦三は病氣で五〇  
日も休んだが、今日から出席す  
ることになり妻が学校へ連れて行  
く。五月末から六月始めにかけ  
てなかなかの重態で難しかつたが、  
それでも全快して良かった。妻は  
午後から農園へ行き夕方帰る。昨  
日のお祭りで行かなかつたので、  
勢の人が集まる。

▼七月一三四日

六時起床、今日も快晴、畠作物  
には困つたものだ。朝、裏庭の花  
畠に水をやる。熊さんは農園行  
き。私は信用組合で用達しをし、  
自転車で銀行へ行き、帰りヨに  
寄つて帰る。朝顔のつるが出土たの  
で手しばをやる。四時頃農園行  
き。バラ花盛り、赤バラ、白、桃色  
などとつてくる。明日小樽へ行く  
べく支度をする。

この日、小樽へ出かける。

## ▼七月一八日

去る一四日小樽へ行き昨日帰つたが、疲れて七時起床す。雨が降つた後は大分凌ぎやすい。熊さんは農園へ行き大根まきの準備やら、リンゴの見落としの袋かけをやる。四時頃四郎を連れて農園へ行く。リンゴの玉も大きくなつたが、虫が多いので袋かけせぬものはダメだ。四、五日見ないうちに赤いバラがきれいに咲いている。花畠の草取りをやる。グスベリの大玉が熟して味も良くなつていて。

四郎は大喜びでもいでいる。リンドゴはまだ早いのでグスベリもよいものだ。七時頃花を手折つて帰る。

## ▼七月一〇日

今朝農園へ行くべく五時起床、洗面早々に出かける。朝のうちには寒いくらい。農園では花畠の草取りをする。一六日の大雨後は草も随分伸びたが、作物も勢いがよくなつた。ダリヤ三株咲いていたが外はまだ蕾だ。六時頃、熊さんも来てリンゴを見回り袋かけをやる。花畠では赤いバラや花ショウブがきれいに咲いている。太陽が昇るにつれてカンカン照りつけ暑くなつたので、七時半帰る。今日は午後から乳幼児相談があり、妻は久を連れて行く。四郎、正治は裸になつて騒いでいる。悦

起床六時、熊さんは早くから農園行き。平さん、林おつかさんが手伝つてくれたとのこと。店は閑散、釣り道具類が売れるぐらいのものだ。道会議員選挙、来る八月一〇日に行われる所以で、そろそろ候補者も出てニギヤカになる。古平は種田富太郎氏が、岡田代議士の応援で出ることに決定、すでに運動を始めているとの

## ▼七月一一日

起床六時、朝、花畠へ行き水を洗面早々に出かける。朝のうちには寒いくらい。農園では花畠の草取りをする。一六日の大雨後は草も随分伸びたが、作物も勢いがよくなつた。ダリヤ三株咲いていたが外はまだ蕾だ。六時頃、熊さんも来てリンゴを見回り袋かけをやる。花畠では赤いバラや花ショウブがきれいに咲いている。太陽が昇るにつれてカンカン照りつけ暑くなつたので、七時半帰る。今日は午後から乳幼児相談があり、妻は久を連れて行く。四郎、正治は裸になつて騒いでいる。悦

## ▼七月一二日

起床六時、朝、花畠へ行き水を洗面早々に出かける。朝のうちには寒いくらい。農園では花畠の草取りをする。一六日の大雨後は草も随分伸びたが、作物も勢いがよくなつた。ダリヤ三株咲いていたが外はまだ蕾だ。六時頃、熊さんも来てリンゴを見回り袋かけをやる。花畠では赤いバラや花ショウブがきれいに咲いている。太陽が昇るにつれてカンカン照りつけ暑くなつたので、七時半帰る。今日は午後から乳幼児相談があり、妻は久を連れて行く。四郎、正治は裸になつて騒いでいる。悦

起床六時、洗面後裏の花畠を見回る。赤いダリヤの大輪三つ咲いており、花が咲いています。外も二、三日中には咲くだろう。度々こやしをやつたり手入れしたので随分元気もよい。朝顔も二つ三つ咲いてきた。私は庭の土を運んだり、薪の始末をやる。正午頃、正治と浜へ出てみる。浜は上ナギ、子供らが海に入つて遊んでいる。夏の浜辺は実に気持ちがいい。文治からはがきが来て、二二日帰る予定。文治は札幌で蹴球大会があり、その選手として行くかも知れぬとのこと。文治はなかなか運動家だ。四郎、悦、正治らは皆兄弟の帰るのを待つている。午後三時頃農園へ行き、花畠のチューリップ、水仙など、春咲きの花の根を掘り草取りをする。リンゴにチヨンキリ虫がたくさんいて驚いた。七時帰る。

## ▼七月二三日

起床五時、今日、灌漑溝を調べるので立会いに出てくれとのことで、六時に出かけた。朝露がいっぱいだ。平さんも来られ、通路のことをいろいろ相談する。その内に相坂君と測量士も来た。上の畠の中間を通るので、なにか良い工夫はないかと相談の結果、松田の畠を通つて水を落すのが良いだろうとのことになり、そのように変更した。今日も炎天甚だしい。一〇時に家に帰る。夜、

起床六時、朝、花畠へ行き水を洗面早々に出かける。朝のうちには寒いくらい。農園では花畠の草取りをする。一六日の大雨後は草も随分伸びたが、作物も勢いがよくなつた。ダリヤ三株咲いていたが外はまだ蕾だ。六時頃、熊さんも来てリンゴを見回り袋かけをやる。花畠では赤いバラや花ショウブがきれいに咲いている。太陽が昇るにつれてカンカン照りつけ暑くなつたので、七時半帰る。今日は午後から乳幼児相談があり、妻は久を連れて行く。四郎、正治は裸になつて騒いでいる。悦

起床六時、朝、花畠へ行き水を洗面早々に出かける。朝のうちには寒いくらい。農園では花畠の草取りをする。一六日の大雨後は草も随分伸びたが、作物も勢いがよくなつた。ダリヤ三株咲いていたが外はまだ蕾だ。六時頃、熊さんも来てリンゴを見回り袋かけをやる。花畠では赤いバラや花ショウブがきれいに咲いている。太陽が昇るにつれてカンカン照りつけ暑くなつたので、七時半帰る。今日は午後から乳幼児相談があり、妻は久を連れて行く。四郎、正治は裸になつて騒いでいる。悦

起床六時、朝、花畠へ行き水を洗面早々に出かける。朝のうちには寒いくらい。農園では花畠の草取りをする。一六日の大雨後は草も随分伸びたが、作物も勢いがよくなつた。ダリヤ三株咲いていたが外はまだ蕾だ。六時頃、熊さんも来てリンゴを見回り袋かけをやる。花畠では赤いバラや花ショウブがきれいに咲いている。太陽が昇るにつれてカンカン照りつけ暑くなつたので、七時半帰る。今日は午後から乳幼児相談があり、妻は久を連れて行く。四郎、正治は裸になつて騒いでいる。悦

とについてまた相談する。地蔵さんのお参りがあり、寺の鐘の音が聞こえる。子供らは妻に連れられてお参りに行き、おもちゃやお菓子を買って帰る。子供時代はこんなことが楽しみなのだ。蒸し暑く力群も甚だしい。

▼七月二四日

起床六時、熊さんは今日から天野さんも来て草取りをする。草もこの暑さで随分伸びた。今日も朝から好天気、よく毎日続くものだ。作物のためにはこの暑さは良い。裏の花畠のダリヤも六株のうち五株が咲く。赤い大輪、白、黄色など桃色のポンポンも咲く。朝顔もポンポン咲く。今日はこの頃一番の炎暑、煙で昼食をしていても汗が出る。この頃は海に山に釣りが大はやりで、釣道具の客が店に来る。今日は土用の丑の日で、海水浴へ行く人が沢山いる。夕方、ナスや花畠に水をやる。妻は四時頃農園へ作物を見に行く。帰つてからの話では、この天気で作物も大きくなつたとのこと。イモ、ササゲの新物が出た。夜は子供らとタライ湯に入る。八日

の月は中天に輝いて、星も満天に輝く良夜だ。明日はまた快晴ならん。

▼七月二五日

起床六時、早速裏の花畠やら戸外に水をまく。よい運動だ。今日もまた炎天で、一六日以来続いている。農作物も生長し、特に水田は良いとのこと。幸治と文治の成績表が来た。本期から甲・乙・丙・丁などの評語で記すことなつたとのこと、心配していた文治の代数も乙で先ずは良かった。

二人とも昨年の一学期の成績より良い。幸治はかなり良い方だ。午後四時ころから幸治と文治を連れて、あまり炎天続きなので農園の水やりに行く。ネギ、グスペリの草取りをし、ナス、キウリ、アジウリなどに水をやる。七時頃までに三人で一生懸命やる。幸治と文治も働くが、幸治は手伝いしてもらわねばならぬ。夕食もおいしい。夜、困りで遊びに行く。道議選、その他時事を談す。新聞によれば去る二三日、美深で大火、六〇〇戸余りが焼失せりとのこと。

▼七月二六日

五時起床、私は洗面後、自転車で農園へ行く。途中、長吉さんの畑を見る。朝の内は寒く露が降りていたが、六時半頃からカンカン照りだして暑くなつた。今日もまた好天だ。キウリの蔓をしばつたり、花畠の草取りをする。熊さんと天野さんが来て草取り、七時半に私は帰る。九時過ぎ四郎を乗せヨまで行く。しばらく話して一〇時頃帰る。午後一時から信用組合で、製材会社の総会がある。五分の配当だ。役員は重任することになり三時帰る。後、阿部の畑まで行く。稻作はこの天氣で良い。古平もだんだん米が出来るようになる。十に寄り話し六時帰る。今日は割りと凌ぎよい。夜は月が輝き良夜だ。

▼七月二七日

起床五時、今日も晴天、今日で一三日も続く。この頃はトミと吉治は久の守役をやる。一時間に五錢の駄賃をやることにしたら、二人とも競争でおんぶしている。今日は泥の木で灌漑溝の通水式

があるので、九時自転車で行く。炎天が甚だしく夏服でも汗が出る。かなりの水田が出来ていて稲の生長も良い。一時、式が始まると、三〇分程で終わり、後、泥の木の学校で祝賀会の宴会が始まる。赤飯に紅白の餅、酒などの馳走があり、二時頃自転車で帰る。

十に寄ったが、酔つたのと疲れで寝てしまった。七時頃目を覚まし帰る。暴飲は今後は慎むべしだ。夜食もせずに寝る。

▼七月二八日

起床六時、昨日の通水式で祝賀会に呼ばれて随分飲んだせいか、まだ酒の気が残っている。酔いしたあとは今度こそ飲まぬと決心するが、またそれを忘れて飲んでしまう。暴飲は慎むべしだ。熊さんと天野さんは墓地の整理に行く。九時頃帰り、井戸替えをするというので、一〇人余りでやつたが正午までに終る。今日は母の命日で和尚さんが来られる。佐渡小岩の、高野氏が来た。昼食を出し、大網のことについていろいろ話す。一時の自動車で帰られた。月末の帳簿調べを

やり、終つて幸治らを連れて農園へ行き、作物に水をやる。一六日に雨が降つて以来一三日も炎天続き。ナス、トマト、キウリ、花などにも水をやつたが元気になつた。七時頃帰る。幸治らもやらせればよく働く。帰つてから裏の花畠にも水をやる。今日は月夜でよい天氣。文治は今日から札幌の蹴球大会があるので行つただろう。

人からの人夫で工事をやるとのことだが大工事だ。熊さんは午前中集金に出かけたが思わしくない。相変わらずの炎天。熊さんはイカ大漁なので、今日は田の船で出てみると二時頃行つた。今日も子供たちは川へ魚すくいに行く。私は店番と、裏の花畠の草取りをやる。夕方、たらい湯に入つたが気持ちよい。文治、今日帰らねば札幌の試合に勝つたのだと幸治が言つていたが、今日帰らなかつた。明日は帰るだろう。悦三は川へ遊びに行つてずうつと裸でいたので、夜、休んでから背中がイタイ、イタイと言つていた。

起床六時、熊さんと天野さんはえびす倉で、大網一〇個の目方を調べる。その後、熊さんは納屋場でカブのまき付けをしてから集金に出かけたが、不漁で入金も思わしくない。子供たちは学校が休みなので、引網を持って川へ魚すくいに行く。午後四時頃、農園へ行き水をやる。天野さんは一人でこやしをやつている。六時半、花を手折つて帰る。

の新聞に、文治ら蹴球大会三位になつたと。それで昨日帰らなかつたのだろう。正午の外浜丸で帰つて来たが、いい成績だったので大元氣だ。朝干したイカもの天氣でよく干せた。

### ▼八月一日

今日は祝聖会の例会日、午前三時四〇分起床す。薄明かりになつた。熊さんが漁に出たので私

が板戸を開ける。やぶ長主人は早起きて薪割をやつて、働く人だ。お寺に着いたのは四時、四人目であった。例のとおり読経後、和尚の部屋で話す。六時帰る。大謀から縫糸類取りに來ていて。熊さん七時頃帰る、一〇〇程だったが、今日の漁では大漁の方だとのこと。早速干した。相変わらず炎天だ。幸治と吉治は午後から農園へ行つて自転車の稽古をしている。消防の自動車ポンプが放水の訓練をやつていたが、出水の的から外れてガラス戸に当り、ガラスが六枚ほど割れた。

### ▼八月三日

今日も熊さんはイカつけなので五時起床、板戸を開ける。吉治とナス畑に水をやる。今日もまた炎天になった。熊さんから六時頃電話があり、大漁したから車をもつて来て欲しいと言う。吉治と四郎が大喜びで車を引いて行く。四〇〇程とつた。早速「しらえて繩に掛けるのも忙しい、この晴天で何よりだ。農作物には一雨ほしいが、イカにはこの天氣は実に好都合だ。

### ▼七月三〇日

起床六時、古平・美國間の道路工事いよいよ取りかかるので、天野さんはそちらの方へ働きに行くとのこと。三ヶ月の予定で、三百

花畠にも水をやる。本間さんが小樽へ行くと聞いたので、岡崎へ届けるイカを頼んだ。熊さん今朝は二五〇程とつて來た。快晴なのでよく干せる。午後一時から学校で、余市の藤田道議候補の演説会があるので行く。四名の弁士も来えてナカナカ盛会だ。四時

帰る。イカの干し返しをしたがなかなか忙しい。星が満天に輝き良夜、熊さんは今夜も一生懸命釣つていることだろう。

### ▼八月二日

起床五時、水まきをし、ウラの

花畠にも水をやる。本間さんが小樽へ行くと聞いたので、岡崎へ届けるイカを頼んだ。熊さん今朝は二五〇程とつて來た。快晴なのでよく干せる。午後一時から学校で、余市の藤田道議候補の演説会があるので行く。四名の弁士も来えてナカナカ盛会だ。四時帰る。イカの干し返しをしたがなかなか忙しい。星が満天に輝き良夜、熊さんは今夜も一生懸命釣つていることだろう。

### ▼八月四日

起床五時、板戸を開ける。六時

頃に熊さんが帰つて來た。一〇〇程の漁がある。今日も幸い好天氣で干すにはいい日和だが、干すのもなかなか忙しい。漁が好調なので、店にもイカ道具を買う客がボツボツ来る。毎日毎日の好天氣で、畑作物には困ると言つてゐる農家もある。道議選も賑やかになり、文書戦はますます甚だしい。この頃の暑さで海水浴はずいぶん賑やかだ。

## ▼八月五日

就寝中の二時頃、花火の音が天空に響き驚いたが、今日は積丹から岩内まで周遊船で出かける日だ。私は先年寿都まで行つたから今回は見合せた。五時起床、洗面後早々に浜へ出て見たが、上ナギで好天氣だ。これなら周遊船も楽しいだろう。イカつけの発動機船も増えたが、発動機船の発達も著しい。六時半、熊さんが帰つて來たが、二五〇ぐらいうつた。今日のイカは一番の大型で秋イカのようだ。早速「しらえ掛けた。天氣が良いので面白いようだ。今日で六日も漁続きだ。今日は土用の丑の日で、海水浴で大賑わ

い。ゴリすくいに行くと言つて、子供らはバケツを持って出かけた。幸治は三日前から自転車乗りの稽古をしていたが、かなり乗れるようになつた。夜、星は満天に輝き良夜だ、明日も快晴ならん。

## ▼八月六日

起床四時半、熊さんは三〇日以来これで七日も続けてイカ漁に行く。

板戸を開け、道路に水をまき、洗面後、自転車で農園へ

行く。水をやつているのでキウリは五、六寸になつたのが沢山なつている。先月の一六日以来、実際に二十日以上も炎天が続いている。農作物は一雨を望んでいるがナ

カナカ思つうにはならぬ。六時

帰る。朝は少しひんやりするぐらいだ。熊さん、一〇〇ぐらいうつたとのこと。立さんからスマーメを買いに来た。一把四〇銭とメを買つて、夕方開ける。昨晚の空模様

から、きっと雨が降るだろうと思つていたがまた天気になつた。今

日で廿四日も天気が続く。先月の一六日以来雨ひとつ降らぬのだ。熊さんも一〇日程続けてイカ漁に出たが、今朝は七〇程だった。イカつけの道具を買う客も来らいだ。幸治は、二時頃行つて投票した。夕方聞けば、八五〇余票の投票があつたとのことだが、一三〇〇余票に對しづい分少ない。小林老母、ユキちゃんが来て、蚊帳を新調している。

## ▼八月一〇日

起床四時半、眠い目をこすり

ながら板戸を開ける。イカつけの発動機船のポンポンの音が聞

水まき。花に水をやる。浜へ出て見る、発動機船がトントンと入港する。熊さんは六時半頃帰る、一〇〇程とつたとのこと。今日も天気快晴、イカにはよいが農作物、特に大根には雨がほしいと皆言つている。

## ▼八月九日

起床四時半、板戸を開け、のち水まき。女達がガヤガヤ通る。何漁でもあれば町が賑やかになる。戸外へも水をまき、五時半農園へ行く。ずうつと一度も雨が降らぬく。ずうつと一度も雨が降らぬが、大根も割合良く育つていてある。あちこち見廻り花を手折つて帰る。熊さん、今日は七〇程。イカもだんだん薄漁になつた。今日は道議選挙日、私は二時頃行つて投票した。夕方聞けば、八五〇余票の投票があつたとのことだが、一三〇〇余票に對しづい分少ない。小林老母、ユキちゃんが来て、蚊帳を新調している。

★ × × ×

以前に日記を原寸で紹介したことがありましたが、原文をそのまま読んでみると親しみがあり、雰囲気も伝わってくるような

氣がする…と好評で、それを望んでいる方もおられます。

今回もそれらのご要望にお応えして、八月七日・七夕祭りの日記を紹介します。

(編集の都合で、日付順ではなく次ページに掲載しました)

▼八月七日

8月7日 火曜 巳卯  
旧六月二十二日 天氣 炎天  
寒暖 八十(華氏八十度)  
起床四時半、板戸をあける。

戸外ニ水マキ、后ウラ花烟けへ  
水クレル。何分廿二日も炎天続  
きの為、作物は枯死すると云う  
サワギ。而し自分の家では割合  
よい。五時頃、浜ひ出て見る。

イカ漁船ハ發動機の音も勇まし  
く入港して来る。港はサキ出面  
連で賑か、浜辺ハ何か阿ればよ  
いものだ。熊さん六時半帰る、  
二百もトレタとの事。自分ハノ  
シ役のカイシ役、此炎天にナカ  
ナカゆるくない。人間ハヒマで  
居るよ里、カラダを活動させ、  
而して載(戴)く御はんはおい  
しい。之か百葉よりもよい薬り  
だ。小供等、父、四郎、悦、ト  
ミ、正の五人、園の平チャーン等  
と農園行、而しておはんやイカ  
等を持ち、ダイナベヤルとて喜  
んで行く。午后から幸、吉も行  
つた。家ハヒツソリする。小供  
時代ハ之か面白いのだ。夕方帰  
つて聞けば、キミ、イモ等を煮

たり、フナスクイ等して遊んで  
来たとの事。夜ハ七夕祭りで、  
小供等幾組も町をアルキ賑か。

悦、正、四郎等もチヨチン(ち  
ょうちん)ホシイとて買ふ。町  
ハ賑かだ。

(原文にはありませんが、読み  
易いように句読点をつけました)

高野名幸作さんの日記は、大

正八年から始まって昭和三七  
年まで、四三年間に亘って継続

し、記録されきました。(紛  
後古平町に寄贈され、元町史編

失などによる欠年は七年分)

身辺の生活や世相が生き生  
きと描かれていて、当時の古平

町のことを知る上で得難い

高野名幸作さんの日記は、大正八年から始まって昭和三七年まで、四三年間に亘って継続し、記録されきました。(紛後古平町に寄贈され、元町史編失などによる欠年は七年分)	
月 日 火曜 巳卯 8 7 旧六月 二十二日	放答の夜の明方や蓮の花 六花

貴重な資料となつております。  
日記はご家族によつて大事  
に保管されてきましたが、その  
さん室で所蔵しております。

（続く）

# 最大の投資

大澤文子

青一色の色紙を貼りつけたような今朝の空、

「わあい的なア」もう夏はそこまで来ているんだ。いち早くふくらみ始めた梅花うつぎの小枝に

朝々子雀達が来て鳴く。

あぐともなく空を見上げて居れば、誰しも旅ごろの湧きくる思いに、胸さわぎを覚えるのはあたり前のことであろう。

そんな時、ふと中村勝栄編集長のもらしたひと」と、

「石勝線に乗つてみたいなア！」

「えつ？」

編集員一同、夢中になつて短歌誌の仕事に精をだしていたのに、ペンを持ったまま驚きの声をあげた。中村編集長の聞きずてならぬ一言に編集員一同聞きもらさぬ者はいない。

即座に双手をあげて賛成、拍手の音は止まず。だが若い一編

集員がませつかえす。

「編集長も肝つ玉小さいねえ。石勝線なんて言わないので、みんなで海を飛びこえドントゆく元気ないのかなア」

苦笑する中村勝栄編集長に一同

大笑い。

それからが大変！ 一週間後、

小学生の遠足よろしく、ふくらんだバッグを肩に手に小さな旅に出た。

特急列車の座席の向きを廻し四座席に場所を得。沿線近くの青田に遊ぶ子雀の群れが一瞬飛び発つ。果てもなく広がる石勝高原の高空を悠々と弧をえがき舞う一羽の鳶。

はるか遠くに連なる狩勝岳、まぶしいくらいに輝く陽のもとに、はや淡々と緑の萌え。

沿線近くの田んぼには、何を啄んだよー

むか子雀の群れ、ふと感嘆の声をあげ、ペンをとりテツサンするもの、自由な心に開放されたひとときの喜びか。言葉を交わすものもない。

やがて編集長先導で見知らぬ駅に降り、見知らぬ町を心のままに歩く。私は無遠慮に心の中の眼を見開き、シャッターを切る。カメラではとる」との出来ない風の流れ：その土地土地の人の方言、初夏の印象がみずみずしく心中に記された。

新得の駅前の「火夫の像」の前で押しからまんじゅうよろしく記念撮影。

「駅前で何か食べたい…」の願望もむなしく、それぞれが持ち寄った車中でのおやつがたたり、「昼食は簡単に…」ということになつた。

「もう帰るんですか？」

改札口の駅員さんのやさしい怪訝そうな笑顔に見送られ「車中の人」となつた。

雲海が表情も豊かにゆつたりと幾筋もの壁を見せはじめた。

ささやかとは言いながら、晴れあがつた初夏の空のもとに心を洗われた」とは「最大の投資」であろう。しばらくは仕事の面でも、家庭でも寛容な日々が続くのであろう。

「しる紋所」との看板を掲げた蕎麦屋の暖簾をくぐる。さすが新得の蕎麦はおいしい。

しこし」とほどよい堅さ、ほどよい手打ちの太さ。タレのうまさがこたえられない。

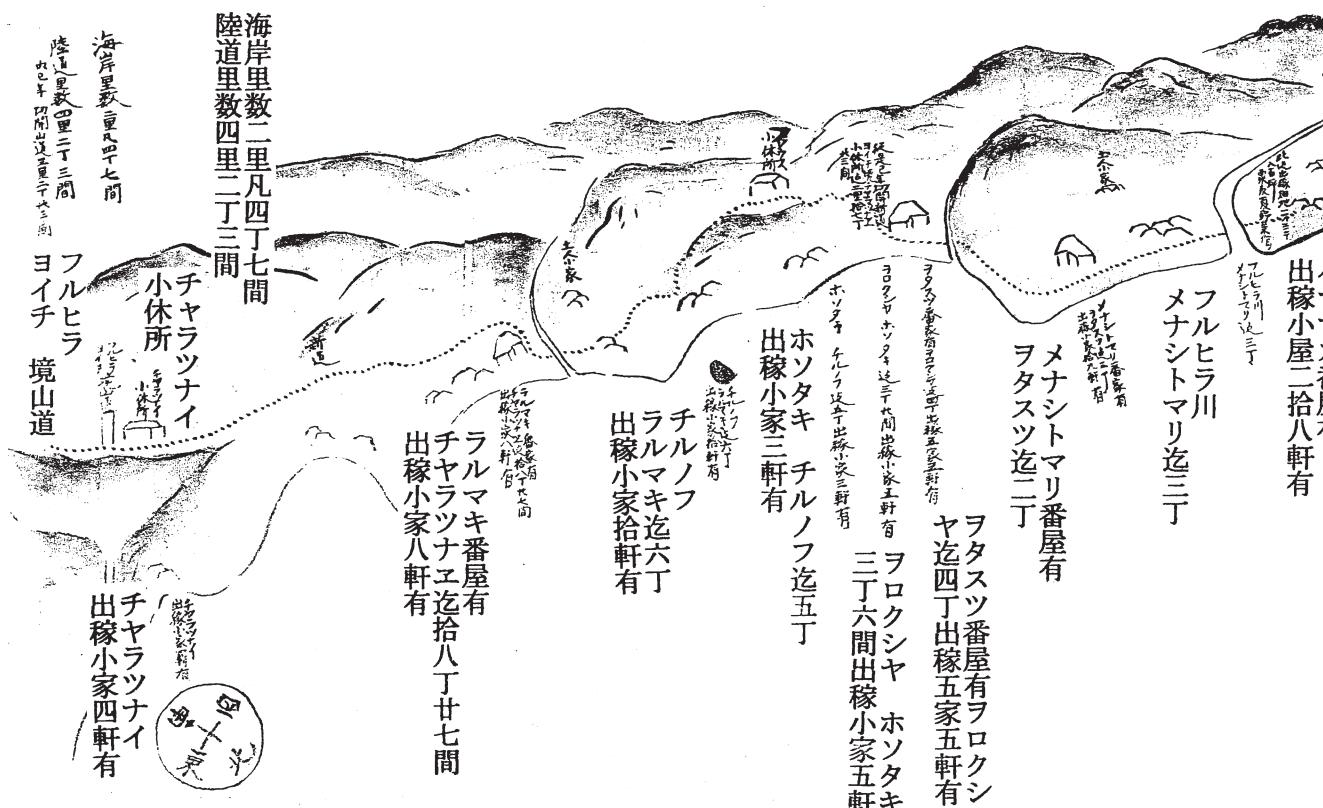
「わざわざ名物の蕎麦を食べに来たんだよー

おどけて言う編集長の言葉に実直そうな店のあるだけは一瞬！ 怪訝そうな眼をむけていたが、やつと納得したのか、とつてつけたように、

「毎度ありがとうございます」と、丁寧に腰をかがめ挨拶をされた。蕎麦を食べはじめた一同は箸を持たまま笑いころげる。

やや一時間後、「またネー」店の主と挨拶を交わし駅へむかつた。

中村勝栄編集長はじめ編集員一同だったが…。 中村勝栄編集長はじめ編集員一同だったが…。



フルヒラ川  
メナシトマリ番屋有  
ヲタスツ迄二丁

メナシトマリ番屋有  
ヲタスツ迄二丁

ヲタスツ番屋有 フロクシ  
ヤ迄四丁出稼五家五軒有

フロクシヤ ホソタキ迄

三丁六間出稼小家五軒有

ホソタキ チルノフ迄五丁

出稼小家三軒有  
ホソタキ チルノフ迄五丁

い、そのために現在の厳島神社と  
なつたと伝えられている。  
(厳島神社については「神社・寺院  
編で後述」)

先号(221号)で、天保一五年  
(一八四四)、古平場所支配人で  
あつた城川長次郎が、港町厳島  
神社に御影石の石灯籠を寄進し  
たとあるが、その一对の石灯籠は  
現存している。



岡

田家では五代岡田弥三右  
衛門の時、松前出店へ家憲  
を定めて送つてゐる。

一 商売申し合わせ精を出す事  
家 憲 の 事

これには更に但し書きがあり、  
「右七か条はきつと相守ること。  
もしこれに背いて異見があり聞  
き入れない時には、三人で相談の  
上処理する」と(以下略)  
などとある。

これは五代秀悦六一歳、嗣子で  
六代玄意二一歳の時であり、嚴  
しく店の者たちに注意している。  
(続く)

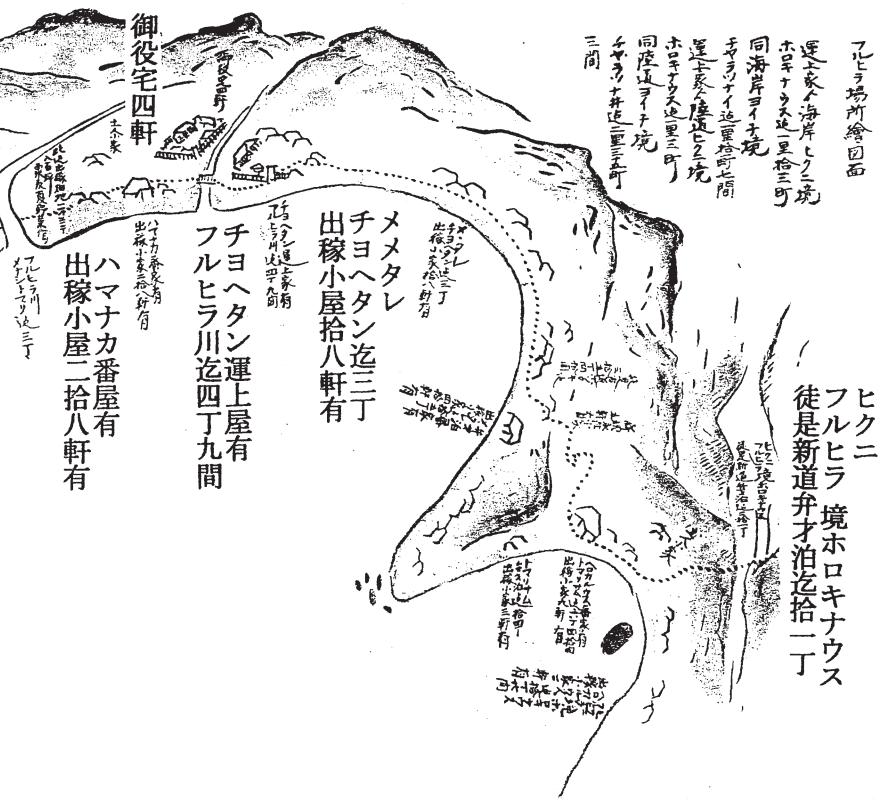
一 ご法度の第一博打(ばくち)の  
事  
一 大酒身持ち不行跡の事  
り出る」と  
一 自分に商売への欲を持つ事  
一 儉約を守り物入りのない事  
一 頭分の者共より申し付けら  
れたことに背かない事  
但し我が儘にならない事

一 勘定帳面は立会いの事  
三人で間違なく捺印の事  
宝暦五年亥四月(一七五五)  
岡田弥三右衛門 同 弥三治  
頭分二人

岡田太兵衛殿

嘉兵衛殿  
理八殿

岡田弥三右衛門 同 弥三治



フルヒラ場所繪図面

## 北前船と古平

一膳箸 (いちせんばし) の船印

5

### フルヒラ場所繪図面

運上屋ヨリ海岸ヒクニ境  
ホロキナウス迄一里拾三町

同海岸ヨイチ境

運上屋ヨリ陸路ヒクニ境  
ホロキナウス迄一里拾三町

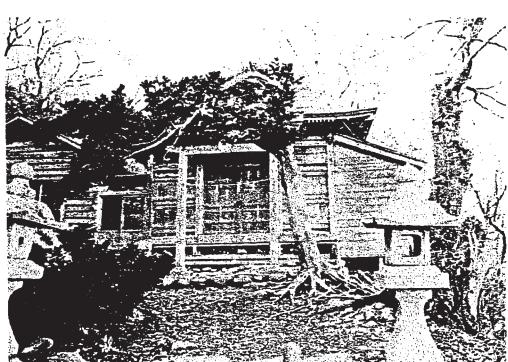
同陸路ヨイチ境  
チヤラツナイ迄三里三拾五町三間

冒頭の説明文は上記の「フルヒラ場所繪図面」に、その他のものは繪図面上に別に印刷した。

### 宝

暦元年(一七五一)、岡田家五代目弥三右衛門秀悦

が、港町裏山の中腹に事代主命を祀り恵比須神社を創建した。これは町内で最も古い年代に立された神社であるが、後年(明治一〇年頃)、ご神体が盜難に遭



この絵図面の作者と作成された年代は確かではないが、安政年代の、今から一五〇年ほど前の

ものではないかと言われている。当時の古平の海岸周辺の様子を知る手掛かりになるのではと、縮小して掲載した。

## ◇運動会

明治三十五年六月一日、運動会が行われた。学校の屋外運動場は狭く、チョペタン河畔にあつた種金・種田漁場の干場が使われた。(チョペタン川の右岸、役場から宝海寺への道路右側の平地にあつた)

- 五、盲人牛引附 高等科女生乙・丙組一回
- 六、障碍物(しようがいぶつ)競走 高等科甲組一回
- 七、登校競走 高等科丁組一回
- 八、旗取競走 高等科乙組一回
- 九、三角旗送 高等科一年ヨリ
- 四年マテ二回

本年ノ運動会ハ右之通り  
明治三十五年六月十一日

浜中小学校生徒一同運動会挙行

三、反字競争 高等科女生甲組

一回

四、煎餅(せんべい)喰競争

大正時代の運動会では、その当時の人々の談話として伝えられている

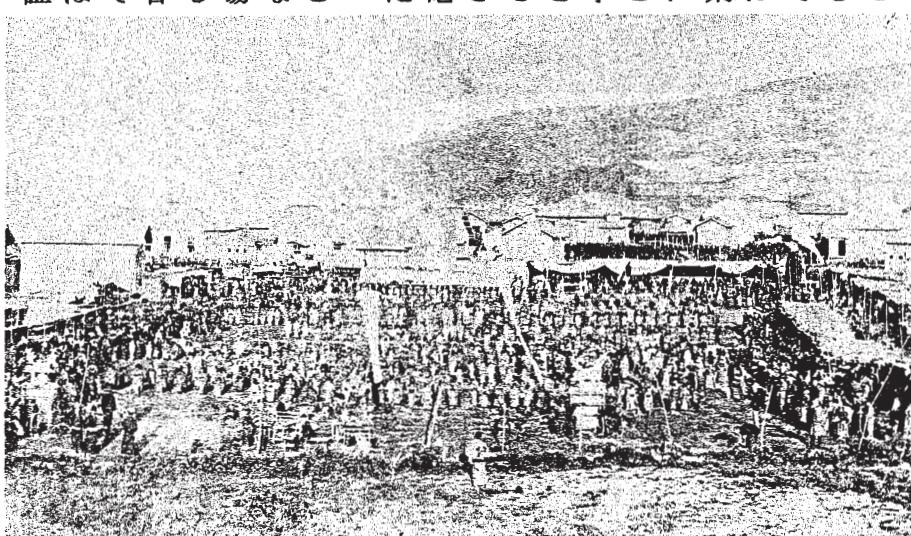
<12>

# 古平小学校探訪

ところでは、出走合図の号砲に、村田銃(明治時代の陸軍の制式銃)で空砲を撃つたという。掲載した写真是印刷で精密さに欠けているが、原版で見る限りでは銃らしいものを持つているよう見える。

現在は銃の所持などには厳しい規制があるが、昭和初期の頃までは在郷軍人(平時には国防に任ぜる)会などでは、訓練のための射撃会や、一般でも鳥獣を追い払うのに、許可さえあれば銃を所持できたりで、運動会での号砲として利用されていたのである。

また、ダンスを踊るときの音楽は拡声器がないので、オルガンを広場の中央に運んで演奏したりとか、手巻きの蓄音機でレコードを鳴らしていたというが、これには多くの人から確かな証言がある。



↑ 種田干場(鮫粕を干すための広場)で行われた古平小学校運動会

古平小学校運動会の会場としてその後も種田干場が利用され、昭和一二年、古平河畔の国有未開地を町が買収して町営中島グランドが造成されるまで、おおよそ三十数年

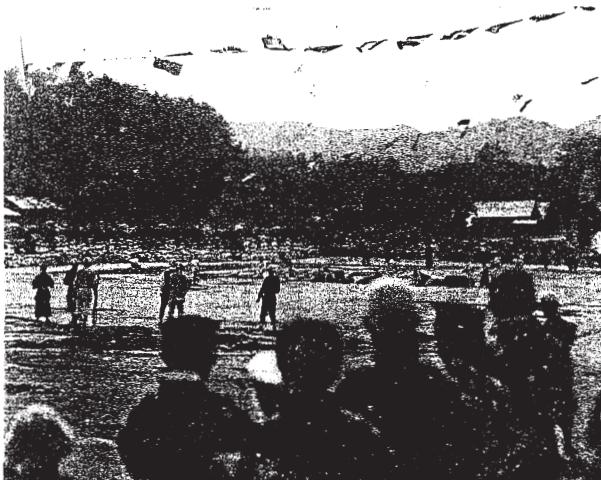
間にわたつて運動会会場であった。

「」は小学校の運動会以外にも、町内の運動大会や行事には使用されたことが多かつたが、町内にあつたその外の干場も、小学校や町内の行事などではよく利用されていた。

その後、分教場(分校)となつた新地小学校の運動会も、本校と合同で行われるようになつた。

このように学校の行事として運動会が行われるもの、世界に例を見ない立てるようになつた。

左側に立つてゐる人が、銃を立てて持つてゐるのが見える



→ 婦婆の女生徒が扇を持つて踊り。中央より右側の建物は古平町役場、その後ろに見えるのが古平小学校校舎



#### ◇国定教科書の制定

この頃になつて(明治三二年)、小学校修身の教科書は國で作るべきだという意見が国会で可決され、讀本(国語)も国定教科書にするよう

国会から政府に意見が出された。  
修身については早くからそのような意見があり、修身教科書調査委員会が作られ、明治三六年、教科書が編さんされたが、この中で教育界

を巻き込んだ事件が発生した。

教科書の出版社と、教科書の採用に関する府県の審査員、学校の教師などの間での金銭にからんだ問題で、一〇〇人余りが逮捕されるという大事件へと広がり社会を驚かせた。

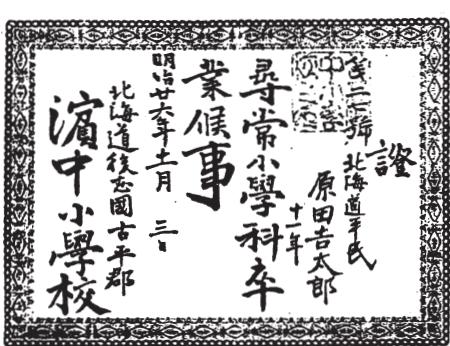
そのような事件があつたが、小学校修身の教科書が使用されたのは、明治三七年四月からであつた。ただ小学校第一学年では教科書がなかつたが、全体に実際の生活上での教訓

い日本独特の行事であると言われてゐる。日本での特徴のある伝統的な学校行事として各地で発達してき

たが、学校として、また地域として、種目にも特徴のある内容が多く盛られているようである。

一方では、明治二七、八年の日露戦争後から、全国の就学率は九〇パーセントを超え、古平小学校でも女子は低かつたが、全校ではこれを超えた。

明治四〇年三月、小学校令を改正し、尋常小学校を六年制とし、これを義務教育とした。今まで四年生までが義務教育であつたが、この時から六年制の義務教育が終戦まで続くことになった。



# 音楽の「丙」の罰あたり

葛 西 庸 三

四月のある朝、共和町のMさんから、一毎年女性だけで同期会をやっていたんですが、今年は男性からの要望もあるので、久し振りにみんなで同期会をしようとうことになりました。六月十九日と二十日なんですが、都合つきませんかーと電話が来た。

生憎図書館の仕事を持つてお誘いは大変有難いのですが、いますので、今回失礼しますーと返事をした。

M子さんは、私が旧前田村考古美小学校に一年生から四年生までいた時の同級生である。学校は丘陵を越えて、私の家から四キロほど離れたところにあつた。同期生は二十四人いたのだが、既に六人は天国に旅立ち、今は十八人が残っている。

で校長ともう一人の先生がいるだけであった。

三年生の時、准教員養成所を終えた若い男のS先生が来た。確かに十六歳くらいではなかつたか。顔も体も細く、声も優しい温和な人であつた。腕白どもは優しい先生をいいことにして、いつも騒いでばかりいた。

音楽の時間であった。裕福な家庭で育つた餓鬼大将のO君が、ーおい、みんな、小便しにいくぞーと怒鳴つた。ボスの手下だつた私達四、五人が、ー先生、小便しに行つてきますーと言つて席を立つた。

は旧幌別郡鶴別小学校に転校した。親父が病死した四年生の秋、私は旧幌別郡鶴別小学校に転校した。

さて、一学期終業式のあと通知箋を貰つて開くと、音楽をサボつた仲間の成績はみんな「丙」であった。当時の評価は甲・乙・丙・丁の四段階で、学校では丙と丁はめつたにつけなかつた。

丁

で校長となつてあるY先生であつた。Y先生は音楽が得意と見えて、とても熱心に指導した。だからケララスの者はみんな音符で歌つていた。黒板に五線を引き、それに音符をつけて歌う勉強の仕方は、私にとって驚きの世界であった。

考古美小学校は音楽の時間になると小便に行き、遊んで「丙」を貰う男には付いていくのははずがない。ある日の音楽の時間、Y先生は私に、前へ出て音符を読み、と指名した。私は教壇の上に唯じつと立つて立つた。どんなに叱られても立つて立つた。どうにか耐え切らなかった。S校長に頭の上がらない、音楽

吐した。どんなに叱られても、絶対覚える気にはならなかつた。旧制中学を卒業し、北海道第一師範学校の本科に入つたが、音楽の授業はオルガンの練習から始まつた。「丙」のことが頭から離れず、さっぱり勉強は進まなかつた。

これまで教職に就いたのだが、結果四十二年も努めて退職する始末になつた。師範を中退して、ほんの腰掛のつもりで教職に就いたのだが、結局四十二年も努めて退職する始末になつた。

音楽の「丙」や音符嫌いは退職まで続き、その間、同僚先生方の世話になり迷惑をかけ、担任の子ども達には誠に申し訳のない教師だつた。全く慚愧に堪えない。

さて、後年、校長になつてある村に赴任した。その地に、音楽に「丙」をくれた先生が先輩校長としておられた。

私はS校長のお顔を見る度に、音楽の時間に小便しに行つて「丙」を貰つた光景が頭の中に浮き出て、心が疼いた。

S校長に頭の上がらない、音楽

の罰あたりの男の末路であった。たとえ自分が、複々式の二学級

音楽の時間になると、いつもそんな状態が続いた。今で言えば学級崩壊だ。結局私は、一日中教室の後ろに立たれていた。

初夏の風が爽やかな季節となりました。が、去る三月一六日、花の木幼稚園では第三七回卒園式と同時に、関係者や園児の父母等七〇名余りが列席して、三七年の歴史に幕を下す閉園式が行われました。

日本では明治一〇年頃に設置された幼稚園が、大正の末頃に法令が出されて盛んになりましたが、全国的にも発展したのは昭和三〇年代でした。

古平町では、当時保育所に通う幼児の母親達からの要望が強く、古平町総合基本計画に先駆けて、公立の幼稚園としては全道で一七番目に設立されたという歴史があります。

世界で幼稚園の歴史がそうであるように、古平町ではスケン漁の最盛期、親の委託を受けて乳幼児を預かるという保育所が始まりました。昭和三一年、新地分校長を嘱託として園長に任命して

など会館を利用して、当時のみなと婦人会の事業として行われました。

「この」での保育事業は、その後町立西部保育所として継続されました。が、浜町にも新生婦人会による保育所が設置され、働く親達からの委託に応えていました。

やがて幼児教育の充実を求める保護者や町民の要望が高まり、昭和四六年四月、古平町立花の木幼稚園として、後志管内では初の公立幼稚園として創立されました。

建物は古平小学校の低学年用教室と付属する建物が幼稚園舎となり、直ちに園庭や砂場、遊具などが設置され、徐々に教育施設の充実へと歩み出しました。

環境の整備と共に組織として、園長は古平小学校長の兼任や、退職校長を嘱託として園長に任命して

いましたが、昭和六二年から現職者を専任園長に任命するようになり、幼稚園開園当時から教諭として勤務し、幼稚園の教育成果の実現に努力された、浅野恵子現園長が就任することになりました。

以来、幼稚園教育の目標に向かって、花の木幼稚園の現状と課題を解決しながら、地域に密着した幼稚園として高い評価を受け、理解と支持を強固なものとしました。

浅野園長は幼稚園の基礎作りから始まり、まさに花の木幼稚園の発展にその半生を捧げたと言つても過言ではないでしょう。

「ありがとうございます！」花の木幼稚園の歴史を如実に語っています。

幼稚園が閉園になる大きな理由は、国による『認定こども園』という制度ができたからです。幼稚園と保育所とという似ているようで全く内容の違うものを国の財政などから、これらを併せ持つ施設として出来たものです。

合併により新たに生まれた『ふるひら幼稚センターみらい』が、新天地で、さらなる古平町の幼児教育の発展を町民は願っております。



## ★喜びの竣工式

二級国道229号小樽・江差線の古平町・余市町間道路改良工事は、昭和二十三年八月着工から一〇年余りの歳月と、約一〇億円にも及ぶ巨費をかけて完成し、昭和三十三年一〇月一五日沿線住民の歓喜の中で竣工式が行われた。竣工式は関係者を始め

一チを建て、国道沿いや祝賀会場への道路沿いには大漁旗を、そして全戸が国旗を掲げてこれを祝つた。

続いての祝賀会は余市町黒川小学校を会場に、北海道開発局長・同小樽建設部長の招待者により行われた。

積丹国道の開通により、古平町

その三分の一の三〇分にも満たない大幅に短縮されたのである。

← 積丹国道記念碑（移設前）

工事事務所長として現場の陣頭指揮に当り功労のあった星光吉は、この難工事に着工以来完成まで、

次のような記録を残している。

「二〇ヶ年の工期と総工費九億二千八四三万円の巨費を以つて、余市、古平間の新海岸道路完成

# 積丹国道開通

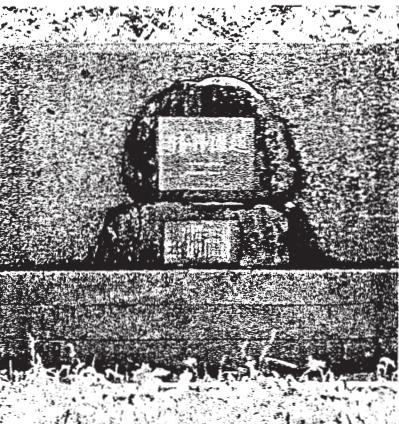
## 住民の悲願 「陸の孤島」から開放



★「積丹国道」除幕式

竣工式前日の一〇月一四日、セタカムイ隨道沖村側入り口近くに、積丹国道完成記念碑が建てられ、その除幕式が行われた。

記念碑は一メートル余の土台に台座を置き、その上に高さ一・三メートル、幅一・六メートルの自然石を載せ、それに七五センチ×九〇センチの仙台石をはめ込んだものである。碑面の文字は北海道開発局長池田一男が揮毫した。



町民多数が出席し、古平中学校体育館で盛大に行われた。余興として校庭で古平小唄の踊りや豊年踊りが披露され、小、中学による旗行列も行われ、町内は祝賀ムード一色に包まれた。

また当日は、古平町ではセタカムイ隨道古平側入口、古平橋、竣工式会場、新地町国道に歓迎ア

役場から余市駅までの道路延長は、これまでの二六・六九キロメートルから一四・一二キロメートルと約半分の距離になつただけではなく、幅員も三倍から四倍半くらくなり、勾配も半分以下ゆるいものとなつた。これにより古平・余市間のバスの所要時間は、今まで一時間三〇分も要していたものが、

→ 余市町へ下つた富沢町で行われた229線「積丹国道」開通式

道新日曜版に『食』の特集  
「おいしいワケを訪ねて」  
「ほっぺおちの旅」という、大  
きなイラストが特徴の記事が、

半ページほどを占めて紹介さ  
れていますが、去る五月一三  
日、古平町へ『べこもち』の  
取材陣が訪れました。

# 古平名物 べこもち

道新日曜版  
六月一五日掲載

「なんで古平町のべこもち?」と、

いぶかしげに思われる方も居られ  
るでしょうが、何でも今から一〇

年ほど前にある大学の教授が、古  
平町内で「べこもち」についての  
調査をし、それを見る雑誌に発表  
したことがあるそうです。「べこも  
ち」のような食の習慣はもともと  
農村が原点だと思われますが、そ  
の記事を見て、それで古平町を選  
んだ、ということのようでした。

取材の申し込みを受けて、「さて  
どうしようかと?」しかし、古平

では「べこもち」は特別なもので  
なく、ごく一般的に、しかも日  
常的に家庭でも作られることが多  
いものですから、その道の達人?

多く、作る場所のこともあり、

本間禮子さんをチーフに五人の  
方々にお願いしました。

メンバーは本間禮子さん(入船  
町)・渡辺シヅエさん(本町)・上  
田由喜子さん(丸山町)、「この際  
ぜひ技術を習得したい」と文化会  
館の佐藤裕子さん、若奥さんを代  
表して本間京子さん(入船町)、そ  
して訪れた取材陣は担当者の森本  
一の佐々木さんとコピーライター  
の加賀さんでした。

場所は家庭的な雰囲気で、とい  
うことで、本間さんが管理してい  
る協働の家の寮の広い台所をお借  
りすることが出来ました。

実演の前にまず見本を一とい  
うことで、定番のべこもち作りも  
一緒にやってのべこもち作り



→笑いと驚嘆の声、リポーターも  
一緒にやってのべこもち作り

平独特の家庭の手作り、飾りで盛  
り上げられた「はなもち」を作つ  
て来訪を待ちました。  
さて一同が来られてその作品を  
ひと目見るや、「わあ! これはす  
ばらしい!」の連発! でした。  
取材に来られた女性連も、早速工  
場式姿で一緒にはなもち作り、期待のうちに蒸し上りの出来栄え  
の程は? 初挑戦ながら、期待以  
て作つたものは「かたこもち」  
とも言わっていました。米や雑穀  
などを粉にして作られる団子類は  
たくさんあるようですが、それら  
の多くは次第に各地に広まって行  
ったことが考えられます。

近頃はまたどうしたことが、「べ  
こもち」の味覚が見直されて大変  
人気があるそうです。道理で時期  
になるとスーパーなどでも売られ  
ているのが目にできます。ただ古  
平ではごく普通に作られている  
「はなもち」だけは、外ではちょ  
うと見ることの出来ない独特な造  
形のようで、これを機会に私たち  
町民も、地域に根差した小さいな  
がらも誇れるひとつ文化として、  
これを守り育てていきたいものだ  
という思いを新たにしております。  
■なお、この取材の様子は、六月  
一五日の道新日曜版に掲載され  
ているか? 期待ください。

# 短歌

## 三月詠草

連休に遠住む孫ら来る便り思はず声出づ老を忘れて

池田テル

過ちを静かにきとす若き僧教へいただき心に沁みる  
穏やかな日ざしが窓辺包む中小さき花も蓄ふくらむ

金子寿子

好みにしいなり寿し供へ仏前に亡き子の齡指折り数ふ

坂本信子

早春譜口遊みつつこの朝も凍れる中を炊事洗濯

鈴木時子

幼きより母知らずとも編むやうに祖母に教へられ今を生きゆく

田中美苗

見舞ふたび眠りの深き母となり夢ん中入り見たし聞きたし

玉谷美都子

親子にてかまくら作り連休に完成まちて記念に写す

丹後初江

月明かり窓に映りて柔らかく凍てつく夜の闇を照らしつ

寺田カツ子

白寿近き夫との暮らしテレビみて食べては寝る日々は過ぎゆく

仲谷喜美能

斜面辺の雪どけ早く谷川に音の激しく飛沫あげゆく

東美知

堀典子

## 四月詠草 古平岬短歌会

連休に遠住む孫ら来る便り思はず声出づ老を忘れて

池田テル

柔らかな光りにつつまれべコニヤはうす紅色に一輪咲く

金子寿子

孫いをり目を輝かせ望みぬし勉強に発つ遠く京都へ

坂本信子

お互いに漁の模様を交換し漁師仲間の今日の日誌に

鈴木時子

春薫る前山に木は連なりてこぶしの蓄咲くよとゆるる

玉谷美都子

我が庭に一番に咲くクロッカスいろとりどりに春を謳歌す

玉谷美都子

先輩の手解きありて詠草を続けたりぬ一年となる

丹後初江

雪解けの道に行き交ふ大型車フロントガラスに泥水跳ぬる

寺田カツ子

一つ家に明治大正住み古りて烟造ると今年も勢ふ

仲谷喜美能

ひと握りの小さき芹を摘みて来ぬ春一番の香をとじ込めて

東美知

堀典子



雜詠  
主宰 水見壽男  
〔四月号〕

空動き山動きたる冬霞 曙天を呑み込んでゐる冬の海  
曇り上ぐる荒ぶり止まず黒鮪  
菩提寺の境内広し笛子鳴く  
海鳴りや雲の流れや山眠る

父母の忌の墓に連舞ふ秋の蝶  
雪あかり運河あかりのちらちらと  
住職は母の末弟菊畑  
何事も無くて眺むる窓の雪

大白鳥沼は真白し利尻岳  
荒天を瞰々わたる虎落笛  
伝説の奇岩に咲かす浪の花  
旅もすがら潮騒聞え冬の月  
枯木立過ぎしむかうにログハウス  
更けし夜の友の靴音虎落笛  
芳ばしく吹きこぼれたり冬至粥

越野清治  
山口悦子  
越野敏雄

本間寿昭  
渡辺嘉之  
室谷弘子

街角に聖歌流れる雪の夜  
この年もやつと終りて除夜の鐘  
荒れ狂ふ海を肴に年忘  
引き寄せる鮪の躍る潮の道  
枯尾花踏みて帰るや曇り空  
渚みち吹きくる崖に氷柱かな  
海鳴りの冬荒れ続く一日かな

外山俊久  
堀典子  
【句評】  
堀典子

【句評】

冬餓うまさ濃く鍋壊すとも  
遺産かな北海道の三平汁  
鰐頭二つ割して番屋汁  
寒風を背なの暮六つ船帰る  
威勢よく跳る板場の躰太し  
冬の海孤高の詩人育みぬ  
冬波の雲とぶつかる高さかな  
枯木立枝の数だけ風生まれ  
虎落笛無明の静寂破りたる  
初雪や深き眠りを促しぬ  
冬の日をむさぼり頌つ波と峠  
指歪み心歪みし寒さかな  
冬海の煽り立てたる恐怖心

【句評】  
室谷弘子

# 怒 潮

—三月—

雪の中耐へる冬芽の逞しさ 外山俊久

凍て緩むことなき潮の岬かな 越野清治 白銀の山野を染める冬茜

宮太鼓初明りして高鳴りぬ

初御空海しづか山静かなり 堀 典子

白寿へと四歩踏み出し明の春 斎藤波留 やはらかき日差しを集め福寿草

年明けの今日よりつづる初日記

二拍して響く郷社初明り 本間寿昭

みぞれ足下重く傘重し 山口悦子 松籟に初鴉飛ぶ官処

拍手を打つて若水供へけり

波鎮め神威岬の月凍る 渡辺嘉之

寒鰈煮付けの蓋のかたことと 越野敏雄 凍土に折れ曲りたる日差しかな

寒雀出窓を覗く程に馴れ

老いとてもそつと覗くや初鏡 室谷弘子

塩分を控へ目と言う鱗漬 大和田絵伊 よるべなき凍月湾を交はしけり

日の射して冬木に寂寥残りをり

年越は里へ帰らぬ子のメール 仲谷比呂古

たたなはる雪山まじかバスの旅 高橋重子 集会の窓に張付く寒の月

雪祭り背に話かけ車椅子

葉を落し枝細々と十二月 (二月号補遺)

# 悠

雜詠  
主宰 水見壽男  
〔三月号〕

冬波と対峙してゐる岳風　　越野清治  
九冬を耐へぬく力蟹暮らし　落葉松にもつれのぼりし萬紅葉  
光飛び鷹は礫となりにけり　旅半ば目に安らぎの紅葉散る  
父母の忌の墓に連れ舞ふ秋の蝶　住職は母の末弟菊畑  
柿の木も一本となり子の新居　雪あかり運河のあかりちらちらと  
雨音の重たき音や冬来る　荒縄に馴れぬ手つきで大根干す  
颯々と神木ゆるる神の旅　神の旅広がる雲の足早に  
一湾の冬めく波となりにけり　冬の庭茶会の着物よく似合ひ  
冬の庭茶会の着物よく似合ひ　初霜の道を人去り人来る  
初霜の道を人去り人来る　岩肌に白波荒し散紅葉  
大空を我がものと舞ふ鷹一羽

## 【句評】

山口悦子

【句評】  
高橋重子

終りには菊が彩る今日の庭　路地走る心凍てつく冬の風  
纏雪山で真つ赤な頬つべの櫻遊び　厳寒に母の残せし綿半  
冬紅葉仰ぐ心の声永久に　息白く輝いてゐる冬の朝  
筆洗ふ指先がまづ冬とらへ　時雨つつ尚しぐれつつ過ぎにけり  
大鳥居色塗り上げて神迎　大島は岩嗜む波の神送  
筆太の庫裡の禁煙十夜粥　半島は岩嗜む波の神送  
一筋の潮目動かぬ初時雨　初鰐に一と鉤入れて耀の声  
初鰐に一と鉤入れて耀の声　冬に入る岬を隠す潮曇り  
冬に入る岬を隠す潮曇り　砂を噛む波の白さや冬に入る  
蒼ざめた風を重ねて冬来る　初霜を踏んで季節の色を踏む  
初霜を踏んで季節の色を踏む　初時雨湾の潮目の正しかり  
時雨来て俄かに翳る岬かな　時雨来て俄かに翳る岬かな  
初時雨音なく湾を呑み込みぬ　黙々と岬を制して時雨来る  
黙々と岬を制して時雨来る

【句評】  
室谷弘子

【句評】  
渡辺嘉之

【句評】  
本間寿昭

【句評】  
堀典子

——四月——

古 平 俳 句 会

春時雨聴きつつ眠り覚めやらず 越野清治 空蝉の樹木に残る爪の跡 外山俊久  
春時雨止むとき深き眠りかな 天然のうなぎ見事に捌かれる

涅槃会の世話役として半世紀 齋藤波留 待針の玉の笑みたる針供養 堀典子  
灯台を借景にして若布刈舟 春浅き夜半の風音静かなる

声荒げ追ひつ迫はれつ恋の猫 山口悦子 少年の声の広場に残る雪 本間寿昭  
暗闇にまなこきらりと春の猫 少年等球追ふ広場雪残る

切り岸の見上ぐる氷柱蠟垂るる 越野敏雄 春の海波間にきらり日を零す 渡辺嘉之  
切り岸や蠟涙のごと氷柱垂る

悔のなき余生生きたし寒の月 大和田絵伊 海峡を鴎と一緒に渡る春  
元日や助六歌舞伎に醉ひ心地 波頭ほどよく折れて二月尽 室谷弘子  
潮鳴りのどこか柔らぐ二月かな

春浅しかもめ肩よせ舫杭 高橋重子 春めきて肩の力のほぐれゆく 仲谷比呂古  
薄氷も庭木の目覚め促して もぐり込む地面の底へ雪解水

# 俳句

三月 雜詠

四月 雜詠

# 古 平 俳 句 会

- 半島を風捲く地吹雪去りやらず 越野清治  
 句の敵も従弟同士や初句会 斎藤波留  
 氷原となりし才ホーック碎氷船 山口悦子  
 寒鯉や俎板の音擣がけ 越野敏雄  
 顔見世の招き懐かしテレビ見る 大和田絵伊  
 迷ひ箸ふれ合ふことも鮟鱇鍋 高橋重子  
 煩惱を残して暮るる除夜の鐘 外山俊久  
 体より火を噴くやうに初笑い 堀典子  
 リズムなる氷柱零の小昼どき 本間寿昭  
 伝説を秘めて凍て立つセタカムイ 渡辺嘉之  
 初夢のなくて白じろ朝迎ふ 室谷弘子  
 ほつほつと居間で目覚めの冬の梅 仲谷比呂古

- 羊蹄山は蝦夷の鏡ぞ春立ちぬ 越野清治  
 冬霞へ有珠の噴煙突きささる 斎藤波留  
 枯枝も若木も雪解零かな 山口悦子  
 蟻涙切り岸氷柱煌々と 越野敏雄  
 駅伝を観戦老いの寝正月 大和田絵伊  
 春を待つ春を呼びつつ庭木かな 高橋重子  
 港町破船の隅で猫の恋 外山俊久  
 春雪の山よりびく槌の音 堀典子  
 初鍊さげて寺訪ふ若き漁夫 本間寿昭  
 雪解風音を立てねばただの風 渡辺嘉之  
 二ヶ月の波に衰へ見へぬ岬 室谷弘子  
 二ヶ月の涛真つ向に膨らみ来 仲谷比呂古

# 古平町史年表

## 昭和35年（1960）～続き

11/15：稻倉石地区の土橋付近の社宅で火事があり2棟が全焼する。以後この日を記念して稻倉石では消防演習が行われる

11/20：寿原正一が衆議院議員に初当選する

得票数 50,893票（古平町2,673票）

北海道第1区当選者（得票順） 横路節雄・  
高田富与・椎熊三郎・島本虎三・寿原正一

12/-：古平町が歌棄町の崎野清宅を買収して、小樽開発建設部へ売却する

12/-：古平漁港第2期工事が着工される

12/-：道教委広報に掲載された伊藤町長の「教育を構築する」が町広報で紹介される

## 昭和36年（1961）

2/19：医療単価の引き上げ問題で、全国の医師の一斉休診が行われる

3/6：古平中学校第3期工事が余市赤石建設(株)により着工される

4/4：降雨と融雪による河川の増水により町内各所で家屋が浸水する被害が出る。新地町の川筋一帯も初めて床上浸水の被害が出る

4/-：みなど婦人会が4月～10月まで、港会館で「みなど託児所」を開設する

5/19：古平町青少年問題協議会が発足する

6/1：古平町役場では公文書の横書きを実施する

7/25：集中豪雨により浜町方面で水害、浸水家屋の罹災者を古平小学校に収容する

7/26：稻倉石地区が全道環境衛生最優秀地区として道から表彰を受ける

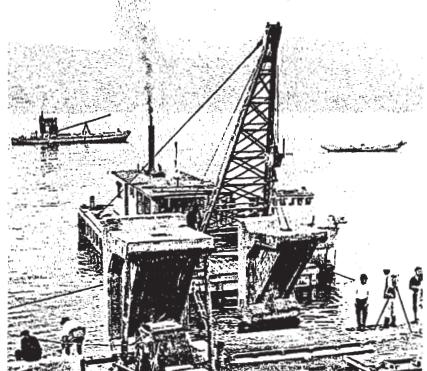
8/16：中島グランドで輶馬競走が行われ、余市・美國方面からも馬が来て出走した



↑ 新人議員ながら質問のため議場の演壇に立つ寿原正一代議士



↑ 夏の集中豪雨により被害を受け、そのりさい状況を視察のため災害対策本部を訪れた寿原代議士



↑ 古平漁港の第二期建設工事が始まる、ケーン設置